

成蹊、新しい時代を見据えた ヴェイジヨン

くろかわ きよし
黒川 清

本稿は平成20年6月21日開催
の通常総会で行われた講演
を抄録したものです



今日は、このような機会に呼んでいただきましてありがとうございます。懐かしい講堂、懐かしいキャンパス。ご紹介がありましたように、私は現在内閣の特別顧問を相変わらずやっております。

成蹊は、あと四年すると百周年というところで、「成蹊は何か」ということをお話しさせていただいて、「成蹊の課題」という話を持っていければいいかと思っています。

お手元に差し上げました『イノベーション思考法』という本は、今年の三月に出たものです。これを読んで、面白いと思ったら、周りの人にお薦めいただければと思います。「はじめに」と「おわりに」というところを見てい

ただくと、私の気持ち、考え方が大體おわかりいただけると思います。

六十数年前に第二次大戦が終わって、皆さんの中にも、そのころこの学園におられ、戦時中に学生だった人たちがいると思いますが、この六十年、一体何が変わったのでしょうか。

今、ちょうど平成二十年ですから、二十年前から比べてみると、世界がどう動いて、日本がどうなったかということを考えてみましょう。そうすると、これから十年先とか二十年先に行うことが起こり得るかということが、ある程度予測できます。

なぜかという、歴史を勉強することとは、過去に起こった実際のことを多面的にいろいろ分析してみる、検証するということが可能にすることです。その過去から現在を見る、さらに、その現在の窓から将来を見据える、予想するというのが大事なことです。

日本の歴史の勉強というのは非常に片手落ちで、特に日本の中学校、高等学校で教える「日本の歴史」というのは、基本的に大学の入試に出ることしか教えないわけです。出ないことは教えないという大體はかけた教育ですが、

さらに大学に入ってから、歴史など勉強した記憶がないわけです。だから、日本の近代史の実際、特に日本にとって都合の悪いこと、これは本当は学ぶべきこと、そして生かすべきことなどですが、全く知らないわけです。

・平成に入ってからの変革

平成元年に何が起こったかという大きなことが起こります。一つは、中国で天安門事件が起こった。実を言うと天安門事件のインパクトは、情報技術が進み、広がっていたので、テレビのニュースなどで世界に見えてしまったということですね。隠せなくなりました。つまり、情報が広がるといことは、それまでの社会のいろいろなシステムで、権力がある、責任がある立場の人たち、社会制度にしろ、企業にしろ、大学にしろ、政治にしろ、いろいろな制度、活動のトップのほうにいた人たちにとってはものすごい脅威なわけです。より広い範囲の人たちが知ってしまうので隠せない、事実を知りたくなる、「権威」に対して疑問を持ち出す、ということが起こるので。それが世界に広がるようになってきたのです。

もう一つは、ベルリンの壁が落ちた。これは冷戦構造の終止。あのときは、東ドイツの人をハンガリーの国境からウィーンのほうに逃がしてあげるといいうハンガリー政府の大英断があつて、一気に東の人が西に行き出しちゃった

ということがすごい力になって、ベルリンの壁が落ちることになるわけですが、その二年後に冷戦が終わる。

日本はどうだったか。そのころは歴史に残る、日経が三万九千円という一番高値をつけた年です。次の年には日経の平均が二万円になっているのですが、なぜか、やっぱり変わらないのですよね。三十五年も右肩上がり経済成長していると、すべての社会制度、人々の価値観、慣習などが。それまでの日本の「政産官の鉄のトライアングル」、お上意識というのが非常にうまくいっていたので変えられないという社会制度、社会的価値観になって、これはある程度当然なのですが、変化に対応できないのです。変化への対応が遅い、当時のリーダーたちはある意味で甘い世界、閉ざされた内向きの社会構造で出世してきたのです。

そこで数年たち、平成6年の一九九五、これが進行する世界の大変化と日本の真相を象徴することが起こります。一月に神戸大震災が起こる。その一年前にロサンゼルスで地震があつて、高速道路がバタバタ倒れたのをテレビで見た。日本の土建技術は世界でも確かにいいのですが、「あんな地震でひっくり返るぐらいやわな高速道路をつくっているからだ」などと、結構えらそうに言っていたのですが、次の年に神戸で起こると、これは直下型とか、マグニチュードが違うから倒れるのはしかたないとしても、問題は倒れた高

速道路の橋桁からたぐさんの手抜き工事がバレてしまったのです。

要するに、今までの政産官の鉄のトライアングル、技術は素晴らしいと言っていたのが、実はそこに巨大な闇と談合と、国民の知らないいろいろなことがある、当事者たちは知っていたわけですが。新聞も本質を突いた報道をしてこなかったわけです。その後、JR西日本のトンネルの落石事故など起こる。さらに東海原子力、雪印、三菱自動車とか、大企業の実に程度が低いというか、みっともないごまかしがゴロゴロ、実に数多く出てくるわけです。それが九五年の一月です。

九五年の三月に何が起こったかという、オウムのサリン事件。私は、サリン事件のときは東大にいました。私の教え子の一人が当事者としていろいろ新聞を賑わしたのです。あのオウム事件では結構優秀なお医者さんがたくさんいました。なぜでしょう。



日本の大学で教えていると、実に学生の質はいい。しかしそんなに勉強しなくていいというシステムになっているので、彼らの優秀な頭脳を刺激するような大学になっていないのです。もともと日本の大学は入るまで、あとは勉強しなくていいシステムだったのです。

長いアメリカ生活から帰って、日本の教育はいかんと感じた。しかも医者になつて卒業して十年もすると、魚の腐ったような目をしている人も多い。つまり、社会制度の欠陥です。それで、いろいろ私なりに選択コースをつくり、教育にいろいろなことをやった。そのころから教授会でも、教育がまずいよ、教育の崩壊が起こっているのだという趣旨の発言をたくさんしていました。

その九五年は、今考えてみると、日本のバブル経済ですと成長していたところの中にあるゆがみ、その支えていた変なところが現れてきているのですが、その中にどっぷり浸かっていた人たちが、なかなかそれがわからないのか、わかっても認めたくないという人が多かったと思います。終身雇用、年功序列、横には動けないという、それが常識だと思っていたわけですから、そしてこのような価値観が、時代を牽引する経済、産業構造にうまくマッチしていたのです。ところが、この価値観は日本の江戸時代以来の価値観とピタリ合うのです。「私は金沢藩の者でござる」とか、生まれた家（明治以

後は、基本的には入った大学で、に変わっただけ）で士農工商と分かれていて一生変わらない、どこにも動けないというのが常識だと思っていましたから。それがピタリ合っていたというだけの話です。オウム事件は教育の崩壊を示すことで、今、教育が大騒ぎされているけれども、あのときに明らかにサインが出ていたのです。

この年の秋には「住専」問題で大騒ぎしましたが、その後の日本の金融の有様、多額の国の借金の現在への始まりを象徴的にあぶりだしていたのです。そして、もうひとつ、この年に「野茂」がメジャーへ行ったのです。「おきて破りをして」の上です。日本の野球とメジャーの違いはテレビのおかげで広く国民、社会に知られてしまい、優秀な若者への選択肢が増えたのです。これは、野球だけではなく、サッカー他のスポーツも、大学も、ビジネスでも同じことがおこり、もっと広がるでしょう。このグローバル化の流れは始まったのです。この流れに抵抗する人企業、大学は世界の負け組になっていくのです。

・世界を変えたパソコンとネットワーク

冷戦が終わり、世界が一つの市場経済になり、八〇年代からみんなコンピュータを使い始めました。コンピュータは、八十年代のはじめにアップルが「アップルII」という卓上のものを出

してきてから急に小さくなり始め、インターネットがチップに特化して、チップはどんどん速く、高性能で、安くなっている。

実を言うと、一つひとつのコンピュータをつくるというのは日本人が得意なのです。ラップトップをつくる、これは最初たぶん東芝がやったと思います。「小さく・軽く」というのは日本人が好き、得意なのです。技術を駆使して、なるべく小さく、軽くしようというのが日本人の大好き、得意なところなのです。

その後、コンピュータは広がったのですが、お互いにつながっていない。それが突然つながり出したのが、九二年に「WWW (World Wide Web)」が出てきて、ドメインとか、いろいろな話がワーツと広がるのです。

だから、冷戦終結の九一年に市場経済になって、それとほとんど時を同じくして九二年にインターネット、つまりみんなが使っていたコンピュータをつなぐというインフラができた。まったく新しいビジネスが出てくる。これがすっかり世の中を変えたけれども、世界が「フラット」になり始めた。日本でインターネットが広がっていったのはごく最近です。つながっているのですが、なかなか一般には普及というか、使いにくかった。使用料が高い。なぜかといえば、郵政省とNTTの出来レースで、安くしない。

ところが、二〇〇一年にIT基本法

ができて、堺屋太一さんが大臣だったから、何をやればいいのかわかっていたので、ダイレギュレーション（規制緩和）になって、ヤフーBBというのがインターネットつなぎつ放しで一カ月三千円以下というサービスを出した。それで一気に普通の人たちも使えるようになってきた。

インフラのファイバーケーブルだ、いろいろな話は郵政省なり国がやるのですが、それをまた利権にするというのはものすごくまずいですね。下品です。これは国民の税金のサービスですから、あとは自由にやってちょうだいとやらなければまずい。九二年にWWWが出てから一体何が起ったかという、今皆さんが使っているようなヤフーとかアマゾンとか、みんなこのシステムで何をやるかということを考える「クレイジー」な若者たちから新しいビジネスが出てくる。それがみんな九四年ごろに出ているわけです。

九四年にもう一つできたのは、サーチエンジンがどんどん出てきて、そのうちたくさん失敗もするのですが、まず抜け出したのがヤフーです。ヤフーもマイクロソフトにTOBをかけられて、今、サブイバルゲームをしています。が、そういう新しいデジタルエイジに考えるような人というのは、大体ハッカーみたいな、ちょっとクレイジーな人たちで、いろいろまったく新しいビジネスをつくる、それにお金を投資して、どんどんビジネスにしちゃうと

いう、ベンチャー・キャピタリストとか、そういうカルチャーがなければなかなかやりにくいのですが、そういうのが出てきた。それが九二年から始まって、九四年にネットスケープというすごいサーチエンジンが出てきて、すぐにWindows95というのをマイクロソフトが出して、インターネットのドメインをどんどん制覇していく、誰でも使えるようにするということが起こってきます。

これでいわゆる世界がつながっているのですが、日本はなかなかアクセス料金が低いという話があったのが、二〇〇一年の基本法からみんなが使えるようになった。例えば、皆さんは日常的にメールを使うと思います。そして、今では携帯電話を持っているけれども、十年前は使ってなかったでしょう。ほとんどが車の電話とテレフォンカードです。しかし、みんなが使うようになって、これが世界中に広がる。一日にどれぐらい世界で売れているか、知っていますか？三百万個です。毎日、三百万個売れているのですが、この携帯電話を見ると、日本の強さと弱さがよくわかる。

携帯電話の世界マーケットの四〇％はノキアです。二番目がモトローラで一四％ぐらい、三番目がサムスンで一三％。日本がようやく名前が出て、九％を取っている四番目、ソニー・エリクソンとLGです。日本は十社ぐらいあるのですが、世界のマーケットの四

％ぐらいしか取れません。

なぜかという、日本の中でまあまあサイズのマーケットがあるから、役所とくつついてビジネスとしてそこそこ成り立つ、キャリアというか、NTTドコモなどの注文、指示を受けてやっていたら、それで済んでいたというだけの話ですが、明らかにこれが日本の弱さです。大きく世界を見据え、理解し、考えるのは苦手。つい「官」に従う、反抗しない。

では、日本の強さはどこにあるかというと、世界の携帯電話の部品の六五％はメイド・イン・ジャパンなのです。これは日本の強さですね。だから、自分の強さと弱さを考えて、強さを、どうやって世界につなげて、それを活かすかということを考えないと、新しいビジネスは出てこない、そして伸びないということ。確かに、日本の強さは「ものづくり」かもしれませんが、これでは「部品屋」です。お客様の心をつかむ「ものがたり」があつてはじめて優れた部品が生きているのです。これがビジネスになるのです。六十年代のソニーの盛田さん、ホンダの本田宗一郎さんのようなビジネスリーダーです。

例えば、グーグルを皆さんよく使っていると思うのですが、これはスタンフォード大学の大学院の二人の学生がいろいろ考えてちょっと遊んでいたのでしょうけど、ちょうど十年前ですね、大学を休学して会社をやるとういうの

で二人で始めたわけです。十年でもう二十兆です。世界中の人がグーグルをどんどん使う、というようなビジネスモデルをつくる。こんな新しいビジネスを出す、「変わっている人」たちというのがなかなか出てこないのが日本の弱みです。教育でも企業でも均一性を重視しているのです。どんどん「フラット」になる世界、その中で拡張していくマーケットを意識した新しいビジネスモデルはなかなか出せない、これが日本の、弱み、悩みです。

日本人だけで何かを考えているということが大きな足かせになって、発想が貧弱なのです。日本の常識が世界の非常識になっていることに気がつかない。多様性、違うことの価値を、本質的に、直感的に心の奥深いところで認識できない、あるいは認めたくないのです。日本の強さ、弱さというのをちゃんと認識してビジネスをしないと負けてしまうでしょう。

・「成蹊」としての「コアバリュー」は？

学校も同じです。「成蹊の強さは何か」ということを考えて欲しい、そしてそこを伸ばすことを考える他との差別化の大事さを「同窓会誌」に書いたのです。どこの学校でも、特に私立学校には創設者のビジョンと、それぞれの歴史があります。それは当然だと思えます。そのビジョンというのは、意外に時代が変わってもそれほど変わらない、人間の本质に触れる普遍的な、

基本的なバリュー、特に教育ではそうですね。福沢諭吉もそうですね。

中村春二先生は何をしたかったかというところ、あのころ例外的な方だったのでしょうか。東京帝国大学を卒業して「教育だ」なんて、友達にカネを出してもらって成蹊をつくるのです。何をしたかというところ、イギリスのパブリックスクールと言われるようなものをぜひつくりたい！と言ってやるわけです。これが基本的な一番の成蹊のコアバリューです。

これをどうやって活かすかというのが成蹊の課題です。僕は、アメリカから帰ってきていろいろな方と話をしたときに、成蹊はそれが強みなのだと。五十年代から大学進学率が高くなりだして、それ以来、成蹊でも大学が一番でかくなっています。しかし、成蹊のコアバリューは、大学ができる前から綿々と続く小学校、中学校、高等学校の「成蹊」、ここにこそ成蹊というバ



リュー、そのコアバリューがあるので。

例えば外から見ていると、日本国内ではほかの大学とどうしても比べられません。みんな同じようなヒエラルキー（ピラミッド構造）の日本社会に慣れていると、成蹊大学は何が違うのかというところを明確に社会に示す、うち出さない限り、なかなか難しい。官尊民卑の日本人、そして文科省に従う文化があるから、成蹊大学が国立やもつと古い大学に比べて日本という中では認められる、飛び抜けることはなかなか難しい。しかし、成蹊の建学の精神、コアバリューが一番宿っているのは、大学に入る前です。日本の大学は一九五五年以来急に進学率が増えますが、これはヨーロッパでも同じことなのです。ヨーロッパも実は一九六〇年は、フランスも、ドイツも、イギリスも大学進学率は五〜七%しかないのです。今は四十五〜五〇%です。

それは主要産業構造が一次産業から工業化へとシフトし変わってきたからです。大学を出てから社会に出てきても遅くないよということ、それまでは一次産業、農産物が圧倒的に強いのですから、義務教育が終わったら早く仕事しないとだめだという世界になっていただけの話です。

そうすると、成蹊のコアバリューを、日本の社会から見ると、世界から見ると、何かあるか。中村春二先生がもともと目指していたようなカルチャー

が脈々とあるのは何かというところ、イギリスのパブリックスクールみたいな、リベラルな、しかし「概念」をやらせるような「規律」、何か染みつけているものがある。そのバリューを生かし、それで差別化する。日本の成蹊は何だということ、日本社会に、世界にアピールできるような、これがコアバリューだ。

このコアバリューというのは、何かと言っても、そう簡単にはできてこないのです。やっぱりこれが伝統の重み。ここ成蹊のキャンパスに来ると一番みんながホッとするのは、大きな樹、サクラとケヤキの樹がたくさんあることだと思えますね。あの樹があそこまで来るのに何年かかると思えますか。そんなことは付け焼き刃でやったってできるものじゃないのですよ。それが成蹊のコアバリューです。

私が成蹊にお願いしたいことは、何が成蹊が他と差別できるユニークなバリューか？ 中学、高校でラグビーやったり、テニスをやったり、今でも馬術部があるとか、プールがあるなんていうのは、ほかのことをやらなくても、その価値に共感する、参加したい、子供たちを学ばせたい人はぜひいらっしやいと、アピールし、話をして、差別化する、このような価値を認識する人たちとの連携を深める、同窓生などはその大事なセクターです。これこそがこれからの成蹊にとっても大事なお客さん、支援層のはずです。

さらに日本を超えてグローバル世界に差別化を見せるということから言うと、もう一つは、僕らの世代が高等学校にいたころの何年か前から始まったプログラムです。最初が三菱商事の榎原さんですが、アメリカのセントポール高校に二年に一人、留学させる。セントポールに行くところ、プレップスクール（大学進学準備学校）ですから大体ハーバードへ行く人が多いけど、ああいうのをぜひ毎年、できれば二人、三人を送れるようにしたいとか。榎原さん、入江さん、有馬さんあたりが、日本社会で世界の信用とネットワークをもった窓口として、日本に対してのバリューをこのような一人の人がつくっている価値はものすごく大きなものになっっているのです。

これを外に向かつて戦略的に、しかもさり気なく、日常的に発信する、知らせることがすごく大事です。特に日本の社会なり、いろいろな人たちに、成蹊というのはああいう学校なんだ、あそこはユニークだねということ、みんながユニークである必要はないのですが、ユニークであるのをいかに差別化するかというものはものすごく大事なこと。これがグローバルに価値が出てくる世界になったのです。そういう人が毎年五人いるだけで、十年先、二十年先というのは、成蹊の世界の中でのバリューというものがものすごく違ってくるだろうと思います。

もう一つは、オーストラリア、ケン

ブリッジとの交換留学、交流をやっていますね。これもものすごく大事なことです。お金で買えるものではありません。

・これからの大学の方向性

近年、途上国や後進国からアメリカやヨーロッパの大学へ行ってしまうと、人材がそれつきり帰ってこないというのが、問題視されていますね。中国やインドは今戻り始めていますし、また戻そうという政策も推進しています。しかし、彼らは本当に戻るわけではなくて、グローバルな経済の中につながる両方をまたぐ人材拠点として、ものすごいパワーになっているのです。両方で仕事をするわけだから。

そういう人たちが日本にあまりにも少ないですね。入江先生はずっとハーバード大学で教えている、有馬さんは外務省に途中から呼ばれて仕事しているといつても、グローバル世界での日本への社会的価値、バリューになっている。大学の同窓生のネットワークも広がっている、たくさんいるということ、海外でも最初からものすごく信用があるわけです。

日本は本当に海外留学する人は減っています。文部科学省にはだいたいぶ突っ込んで留学生交換などやらせたいと思っっているのです。大学生も一年間どこかに行かせる。提携大学があると思うのですが、向こうからも来させる。そういうことを一年でもやると、何もい

きつばなしになるわけ（たまにはそういう人もいるのもいいのですが）ではないので、例えばアフリカでも、ヨーロッパでも、アジアでも、一年交換すると、そのときの友達というのはたくさんグローバルに広がるネットワークをつくり出すわけです。今はメールでも何でもありますからね。

それが将来ものすごい力になる。またインドの人はこんなことを考えると、全然常識が違うとか、たくさんあるわけですね。イスラムもそうだし。大学は学部の間で半年から一年でもいいから、とにかく一対一で交換させよう。授業料は両方取っているのだから別に要らない。それで増やそうかなと思っているのです。

福田さんが、留学生三十万人なんてそんな来るわけじゃないですよ。日本の大学は魅力ないもの。しかも今、世界の共通言語は英語だから、英語で授業をやつてなかつたら、日本の大学には留学生は来ないに決まっている。

成蹊は、小さいスケールですが、交換留学を実際にやっていますから、ぜひそれを広げる。今、アジアの学生なども、大勢の学生がアメリカやイギリス、オーストラリアに行きますね。日本人にはさっぱり行かないというのは、ますます引きこもり症候群になっちゃうわけです。日本でどんどん出ていくのは女性だけです。AFSみたいにアメリカの高等学校に一年行かせるといふのが、今やどんどん日本から

は応募者が減って、しかも七五%は女性になってしまった。

なぜ女性が多いかというと、日本の女性は魅力があるというのが一つあるのかもしれないけれども、日本社会は女性に差別的で、あまり先行きの希望が持てないと思っていますから、有能な女性ほど、どんどん留学しちゃうんです。そうすると、残った男はますます引きこもり症候群になっちゃう。非常によくない、悪循環だと思います。

そういう意味では、ぜひ成蹊は、イギリスのパブリックスクールのカルチャーでもともとつくられているわけだからこれを生かす。皆さんも、教育関係者も結構読んでいるのではないかと思います。慶応大学の先生をされていた池田潔先生が『自由と規律』(岩波新書)という本を出しています。あの先生は、高等学校からイギリスのパブリックスクールに行つて、それからケンブリッジへ行つて、ドイツで勉強されて、その後、慶応で教えておられたのですが、『自由と規律』を読むと、パブリックスクールと言われるのは、「公的な学校」という意味じゃないですね。いわゆるパブリックという、社会に貢献するようなリーダーをつくるというフィロソフィーがあるの、あれを読むと、「あ、そういうことを中村先生は考えていたのか」というのがよくわかります。

そういうようなところがあるような学校にしていふこと。つまり、今は、

いかにほかに比べて差別化をするかということが、そのインスティテューション(組織)の価値を生むところだし、その特徴的なローカルな価値というのは必ずある。そのローカルな価値の合うところ同士で、グローバルにいろいろなネットワークをつくるというのが、ものすごくやさしくなっていく。それにはこれからの教育の場面、つまり将来を担う若者たちが自分のネットワークをつくつて(これは大学院ではないのです)、将来は政治家になるとか、ビジネスをやるとか、学者になるとか、いろいろな人たちがいてこそいいわけなので、国境を越えてそういう人たちが、そういう価値観に基いた経験を共有することによって、カルチャーの違いとか文化の違いとかを認識しながら、グローバルの世界で、国境を越えたいろいろなチャレンジにみんなが挑戦していく人たちが一人でも多く出ることこそが、成蹊の価値であり、日本での成蹊の価値であり、グローバル世界での成蹊の価値であり、日本を変えていく力になるのではないかと思います。

日本は、大学はいつまでたつても閉鎖性だなどという話をよくするのですが、そういう意味では、今、世界中の一流の大学と任じているところは、世界中の将来のリーダーになるような若者を引っ張ろうと思つて、いろいろな工夫をしています。例えばMITの教材は全部ウェブで、無料で見られますから

ね。それだけ自信があるから、どんなにみんないらっしやい、使ってくださいということを示している。大学はそういうところでなきゃいけないのです。そういう意味では、日本でそんな大学があるかという、もともとここに近いICUはそういうことを伝統的にやっていますが、今、それを売りにしてやっている大学が二つあります。

一つは、大分にある立命館アジアパシフィック・ユニバーシティです。これは準備を五年ぐらいやって、今は学部学生だけで五千人ぐらいいる。そのうち半分は日本人ではありません。日本語でやる授業もあるけれども、半分は英語でやっています。スリランカとか、イスラムとか、いろいろな子がいて、あそこのセミナー、授業は楽しいです。

地元、大分の町はどうなっているかというと、非常に活性化している。そういう留学生たちが下宿をするとか、



アルバイトに来るとか、いろいろなこともありますし、そういう人たちがスリランカナイトとか、いろいろなイベントを企画するわけです。自分たちの文化を紹介する。だから町も非常に活性化しているし、うちの子供が行っているからといって、アジアでも少しづつ中産階級が増えてくると、家族も温泉に行こうなんて時々遊びに来たりして、非常に活性化しているというのが一つですね。

それから、スイスのサンガレンという、ビジネスでは有名な大学があります。このサンガレン大学では学生たちが、三十八年前から自分たちが主催して、ヨーロッパが中心でしたが、今は世界の学生に二百人ぐらい来てもらって、ビジネスのリーダーを四百人ぐらい集めて、毎年セミナーをやる。私は去年と今年招かれて行ったのですが、三十何年やっている、学生が主体なのですが、いろいろな人たちが参加して素晴らしい会になっています。

日本からも英語のエッセーをもとに選考して、十五人ぐらいけるのですが、日本人の学生というのは比較的少なく、半分も行かないですね。エッセーを書いたりするのが苦手なのかもしれないけれども、今年アジアパシフィック・ユニバーシティの学生が六人も選ばれて参加しています。そういうことに慣れている人たちが数多く出ることがこれからは大事なことです。

もう一つは、三年前から始まった、

秋田に国際教養大学というのがあります。これは非常に新しい大学のあり方をよくあらわしていると思うのですが、一学年二百人で、全部リベラルアーツ(教養科目)ですね。一年目は全員寮に住んでいるわけですが、全部英語の授業。日本語を取りたかつたらこれもありますが、基本的に授業は全部英語で、一学年二百人のうちの百三十人が日本人で、七十人が外国人。その日本人の百三十人の入学生は、今年目なので、なんと、偏差値なんて一つのパラメーターだからあんまり信用しなくていいのですが、河合塾、代々木ゼミナールというところを見ると、国立大学はほとんど勝てなくなっていますね。今年入学した生徒たち、去年もそうですが、偏差値が東大の文Ⅲぐらい、八〇を超えている。だからそういうニーズはすぐあると思いますよ。

いろいろな連携校があつて、日本の学生は、外国にある連携校に一年必ず行かなくちゃならない。この大学はあまり宣伝はしていないかもしれないけれども、非常に人気が出てきています。そういうニーズは明らかにあるのだと思います。そのうち活躍する卒業生が何人も出てくるでしょう。

・再び「成蹊」のコアバリューは？

つまり、大学もそうですが、この学校が一体何をして、どういう目的を持って人を育てているのか、これが学校の財産。成蹊はそういう意味では非常

に国際性が高くて、英国のパブリックスクールのような価値観、イメージがある。ここへどうやって転換していくかというのが大事ですか。これを生かしている生徒やコースはまだまだ数は少ないけれども、そういう選択肢というのは、特にグローバル時代を迎えて成蹊の一番の魅力です。海外から来た学生さんも、中学・高校など特にそうだと思いますが、このキャンパスに来て、入り口の大きな樹を見ただけで、全然気分が違う、何かを感じとるだろうと思います。

新聞広告などをしなくても、今はウェブサイトがある。キーワードを入れておいて、誰かがGoogleでサーチしたときに、成蹊のサイトをどう上にあるか、という工夫が大事。ウェブサイトのつくり方がとても大事なエレメントです。そういう意味では、たまたま「成蹊」というところで何か当たる、次々とクリックしたくなるようなウェブサイトのつくり方をしない限り、お客さんを引っ張れないということがあります。ぜひその辺も工夫されるというか、そういうプロたちといろいろ相談することも大事です。

それと実際には、中学とか高校とか大学の間に、一年間のブレイン・サーキュレーション(※1)するということ。これはものすごい価値を、将来になってその配当金がばかでかくなる可能性が非常にたかい。ぜひそれが成蹊の「売り」だということを戦略的に推進

していくのが、今までの伝統と実績にピッタリ合う成蹊のコアバリューになつていく、これを伸ばすことだと思えます。

そういう意味では、僕らが卒業したころも、オリンピックの馬術に出た影山さんとか、いろいろな人がいたし、そういう変わった人が出てくるのがすごく大事なカルチャーですね。ほかのところと真似しようとしてもなかなかできないだろうと思います。

成長してくるアジアの若い人たちはほとんど外国で勉強しようとする人たちがたくさんいますし、日本の若者がなぜもつと行かないのか。青年は荒野を目指すなどとは遠い昔話でしょうか。今は北京大学、東京大学等々いろいろところで、むしろ学生同士がどんなネットワークをつくり始めているということが起きています。ぜひそういう動きをさらにエンカレッジ（後押し）していくのが大事だと思います。

・「成蹊」とは

お手元のレジュメに書いてあることの一部だけ話させていただきました。雑駁な話で誠に申し訳なかったのですが、やはり成蹊の場合には、今日も来てみると、あんなに大きな樹がこんなにはたくさんある大学なんてそう多くはないと思いますね。入ってから大きなケヤキがズラッとあって、校庭の中をちよつと行くと、太い桜の樹がズラッとある。こんなことは時間がかかる、

とてもお金では買えない、素晴らしいバリューですね。

これは口先だけで付け焼き刃のようなことを言っているのではない、本当の価値だということを感じさせる、思わせる、感動的でさえある、すごいものだと思うのです。ぜひ成蹊を、私も少しでも役立てることがあれば、外からも中からもいろいろな応援したいのです。成蹊のいいところを強くする、強いところをさらに強くする、というのが一番大事です。

普通の人は普通でいい。でも強いところを強くすることによって、全体のバリューを上げていくということを、戦略的としてぜひ考え、実践してほしいと思います。それが成蹊の伝統であるし、今度の百周年というところに向けても、それがもうちよつと見えるようになってくると、やはり成蹊というのは違うという、この感性、価値観を共有する若者、ほかの価値観とは違った学生さんを集めるといのがすごく大事なことです。偏差値で東大にたくさん入ったからここがいい、なんて学校とは全然違うんだという世界にこれらのグローバルな時代はなってくるし、そういう人たちに、成蹊はこういう人をつくりたいんだというメッセージをどう伝えるかというのが、大事な課題であり、今日の私の一番のお願いであり、皆様同窓の方々へのメッセージにしたいと思います。

最後に、私はいろいろなところで発

信していますが、ぜひ私のウェブサイトを訪ねてください。「グーグルする」とすぐに出てきます。

ご清聴ありがとうございました。

※1 ブレイン・サーキュレーション

（頭脳循環―海外への頭脳流出ではなく、戻ってくること）

政策研究大学院大学（高・30年）

略歴

東京生まれ。

成蹊中学・高等学校を経て、東京大学医学部卒業、同大学院医学研究科終了（医学博士）。

1979年 カリフォルニア大学

ロサンゼルス校（UCLA）内科教授に就任。

1989年 東京大学医学部第一内科教授

1996年 東海大学医学部長

1997年 東京大学名誉教授

2003年 日本学術会議会長

などを歴任

政策研究大学院大学教授、内閣特別顧問を務める。

表紙絵の言葉

心の故郷煉瓦色の本館

武蔵野の面影が残る欅並木を通り抜けると、煉瓦色の本館が目飛び込んできた。大正十三年に建てられた本館は、戦火で焼かれることもなく、八十四年間、卒業生そして在校生を穏やかに優しく見守っているように思えた。それと共に成蹊で過ごした青春の日々が懐しく思い出された。校内はいつも温かく優しい風が流れていて、学ぶ喜び、そして友情と信頼、生きていく上で大切なものを与えてくれた。

大学に入って初めて覚えた卓球は、今でも私の楽しみの一つになっている。懐かしくなつて左に本館を見ながら、昔の卓球場へ向かう道を歩き始め、ふと足を止めスケッチを始めた。私の心を和らげてくれる青い空と煉瓦色の本館と緑の芝生。ゆつたりと建つ本館は私の心の故郷のように思えた。

趣味である絵と卓球、そして成蹊を通しての人とのつながりをこれからもますます大切にしていきたいと思つた。

齊藤君子（文・47年）

